

《シリーズ ケアをひらく》

弱いロボット

岡田美智男 著

定価2100円(本体2000円+税5%)
医学書院 ☎03-3817-5657



じゃんけんロボットが超高速のあと出
しで、人間相手に勝ち続けているという。
実にわかりやすいロボットだが、本書は、
これとは対極の「ひとりでは何もできな
いロボット」の開発ストーリー本である。

著者は1960年生まれの岡田美智男
氏(豊橋科学技術大学教授)。堅苦しいの
かなと警戒気味だったが、理科系の几帳
面な発想ではなく、文科系のいい加減さ
がつかみどころのないハードルを越えて
いく。なかなかおもしろい。

大学では量子力学を専攻するが、研究
室の配属を決める際になって、じゃんけ
んで負けてしまい、音声科学や音声認
識・合成などを専門とする研究室に配属
された。人間万事塞翁が馬という楽観が、

「他力」に身を委ねる度胸が開発を支えて
いるようだ。

開発秘話はこうである。パソコンの能
力が増すに連れて、ロボットが発話でき
るようになった。そうすると人間との言葉
のやりとりが可能になるのではと誰しも
思うが、次なる言葉を予測して会話するこ
となれば、「指教的な爆発」となる膨大さで行
きづまってしまふ。ここまではNTT基礎
研究所でのこと。ここで異動の話が舞い
込む。極めて恵まれたケースだと思いが、
日本の研究開発の一端が見えて興味深い。
異動先はATR(国際電気通信基礎技
術研究所)で、30年前に鳴り物入りで京
都・大阪・奈良の県境にできた「けいは
んな学研究都市」にある。研究プロジェクト
の年限を5〜7年として、新しいプロ
ジェクトに潔くバトンタッチし、研究者
を絶えず流動させている。

なんにもできない

「待つ」だけが取り柄のロボ

ここで関西弁のしゃべくりに出会い、
テーマは「なにげないおしゃべり」雑談
となる。研究所は甘くはない。理屈はい
いから、研究内容をデモンストレーショ
ンしろとなる。理解が得られないと研究
資金が獲得できない。ここで登場するの

が、CGで作った仮想的な生き物(ク
リーチャ)のトーキング・アイこと「お
しゃべり目玉」。「あのなあ」「なんやなん
や」「こんなん知つとる?」「そやなあ」
とゆつくり二つ目玉が交互にしゃべって
いる。感情が行き交う。

このトーキング・アイがとりもって
れて、オランダへ交換研究員として出か
けるチャンスが巡ってくる。そして、ク
リーチャ「む」の出現である。京都の
マネキン作家たちが作ってくれた。口の
ような眼、角のような尻尾、丸みを帯び
た体形、発泡ワタランゴムで作られた柔
らかく弾力的な体表、ヨタヨタした動き、
乳幼児なみの喃語での応答。

この「む」が障害児の養育現場でその
実力を発揮する。子どもたちはいつも先
生から教えられるばかりだが、「む」に
は教えようとする。わかった?にキョト
ンとしている「む」に、ダメでしょ、と
先生の口調を真似する子どもたち。高齢
者施設でもそうである。いつもはしゃべ
らないのに、「む」だとしてこんな
におしゃべりが続くのか、となる。また、
人は待つてくれないが「む」はゆつ
くりの関係構築につきあってくれる。
ひよっとすると、ロボット精神科医
「む」となるかもしれない。